

第16回 国立公園満喫プロジェクト有識者会議 議事要旨

1. 日時：令和5年3月29日（水）10:00 - 12:40

2. 場所：霞ヶ関ナレッジスクエア（オンライン会議併用）

3. 出席者：

（検討委員 ※50音順・敬称略）

涌井 史郎（東京都市大学 特別教授）【座長】

石井 至（株式会社石井兄弟社 社長）

江崎 貴久（旅館海月 女将、有限会社オズ 代表取締役）

（ゲストスピーカー ※敬称略）

大西 雅之（鶴雅ホールディングス株式会社 代表取締役）

坂元 浩（一般社団法人せとうち観光推進機構 専務理事/事業本部長）

（環境省）

西村明宏環境大臣、奥田直久自然環境局長、松本啓朗大臣官房審議官、細川真宏総務課長、

則久雅司国立公園課長、萩原辰男自然環境整備課長、中澤圭一野生生物課長

岡野隆宏国立公園利用推進室長、宮澤泰子国立公園課課長補佐、志田健治国立公園課課長補佐 他

（関係省庁等）

富田建蔵（観光庁観光地域振興部観光資源課長）

井口真輝（林野庁国有林野部経営企画課国有林野総合利用推進室長）

平野達也（日本政府観光局企画総室長）

4. 議事概要

1) 開会挨拶

○西村環境大臣より冒頭挨拶

- ・ 本日は第16回「国立公園満喫プロジェクト有識者会議」に御出席いただき感謝申し上げます。2016年から始まったプロジェクトも7年目を迎え、委員の皆様のお力添えをいただきながら、取組を進めてまいりました。当初、特に8箇所の国立公園で始めた取組を、昨年度からは、全34国立公園に展開いたしました。
- ・ 今国会の岸田総理の施政方針演説にも、「国立公園を活用した観光地の魅力向上に取り組む」ことが盛り込まれました。インバウンドが再開する中、国内外の利用者数の回復を図り、保護と利用の好循環による地域活性化に取り組んでまいります。
- ・ 新たな展開として、民間事業者の皆様からの提案を踏まえながら、宿泊施設と体験を組み合わせた、地域全体の魅力を向上させる取組を進めることとし、本年1月に検討会を設置いたしました。今後、有識者や事業者、自治体の皆さんの御意見を聞きながら6月を目途に実施方針を取りまとめ、来年度中にモデル地域を決めていく予定です。
- ・ また、今回、全ての国立公園が共通して利用者や地域に約束することとして、「国立公園のブランドプロミス」を決定し、国立公園のブランド化と利用の高付加価値化をより一層進めていきたいと考えています。

- ・ 本日は、国立公園の現場で取り組んでいらっしゃる方々にゲストスピーカーとして御出席いただき、今後の満喫プロジェクトを進める上での貴重なお話を伺えることを楽しみにしております。有識者の皆様には、国立公園の魅力をさらに高めていくため、そして、国立公園を訪れた方に感動と学びを提供するため、今後の取組について、忌憚なく御意見をいただきたいと思いますと考えております。
- ・ 安倍政権時に国土交通副大臣でしたが、全省庁を挙げてインバウンドの取組をまとめた際、委員の皆様にご協力をいただきました。今後はインバウンドのみならず、国内の皆様にも国立公園を素晴らしいと思ってもらえるような取組をしたいと考えております。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

2) 議事

(1) 宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上の検討について

○事務局より説明

【涌井座長】

- ・ 魅力の本質は保護と利用の好循環である。その中で魅力をどう磁力に高めていくかが重要である。日本の国立公園にはレンジャーという手足があり、地域事情に精通して現実的な案を出していくことができる。民間ディベロッパーは側面的にしか見ていないので、環境省から方針を出していくことが求められる。

(2) ゲストプレゼンテーション

○大西氏よりプレゼンテーション

【江崎委員】

- ・ コロナ禍の事業展開についてお聞きできて感動している。コロナ禍では計画の推進にあたり補助金に助けられたというお話があった。一方、日々の事業でも新規事業でも、特に人材確保にご苦労されたのではないかと思うがいかがか。

【大西氏】

- ・ 人材確保には苦労した。しかし地元には「まりもクラブ」という、現在40名ほどが所属している団体があり、日々多くの活動を展開しながら地域のブランド力を高めてくれている。
- ・ また、地域内の外国人で阿寒 VJCS (ビジット・ジャパン・キャンペーン・サポーターズ) を組織した。地域のレストランメニューの外国語表記や、地域イベントのナレーションなどを担っていただき力強い存在になっている。
- ・ また、補助金を活用することで、本州の企業から観光協会に出向いただくなどご支援をいただいている。人材がキーポイントなので、今後ともよろしくお願ひしたい。

○坂元氏よりプレゼンテーション

【西村大臣】

- ・ ここ数年はコロナにより観光業界は大変ご苦労されたことと思う。国内旅行、インバウンドとも増えてきたようで、私も週末は新幹線が取れないことがある。だいぶ人が動き始めたと思うので、そ

れぞれ頑張っていたきたい。一度訪れた場所に再び訪れたいと思えるような、瀬戸内であれば今回は西に行ったので次は東に行ってみたいと思ってもらえるような取組を進めていただければと思う。そのためには魅力の発信が重要であると思う。

- ・ 環境省もレンジャーとともに地域の資源を守ってきた。その資源を活用して地域が潤い、それにより資源が保全されるようなウィンウィンの関係にしていきたいと考えているので、今後ともご協力をお願いしたい。

(3) 国立公園等における利用の動向について

○事務局より説明

【涌井座長】

- ・ 結果については生のデータの説明として受け止めるが、コロナの状況を割引いて見る必要がある。
- ・ 今後の課題としては、1つ目に調査の設計をどうするか、2つ目に結果からどのように定性的な方向性を見出すのかという点がある。

【観光庁】

- ・ 各公園の平均宿泊単価があればご教示いただきたい。

【事務局】

- ・ 手元にはデータがないため、後日観光庁に回答したい。

【観光庁】

- ・ 承知した。宿泊の高付加価値化、上質な拠点整備という視点からご質問させていただいた。

【江崎委員】

- ・ 定性的な指標について、質の指標とはどのような観点で質としているのか。サステナブルの意識が高まっているが、それと質の指標が連動していないのではないかと思う。これらの質の指標はほぼ経済的な指標かと思うが、社会的な質の指標も必要である。サステナブルの意識の高まりがどう支出に関係しているのかという点や、経済や地域への貢献とどう関係するのかについても見られるとよい。

【石井委員】

- ・ サステナブルツーリズムについて、飛行機などが排出する二酸化炭素の排出量分を旅行代金に上乗せして排出権を購入できるツアーが出てきている。無いよりはいいが、拝金主義的にも見えてしまい、お金を払えば良いのかという感想を持っている。今の若い方、特にZ世代ではサステナブルが旅のモチベーションにもなりうるようなので、環境省としてはこの分野をリードして、カーボンオフセットに留まらずカーボンネガティブに至るくらいの勢いで取組を進めてほしい。具体的には、例えば香港からの旅行者が、日本に来て木を1本植えることでオフセットできるような仕組みはどうか。単にお金を払うのではなく、実際に二酸化炭素が固定される方法で実施できる形を考えるべきではないか。

- ・ 日本でもっとも進んでいるのはペットボトルのリサイクル率で9割を超えている。一方、欧州では4割、アメリカでは2割に留まっている。日本で唯一、2つのゼロカーボンパークを持っている釧路市では「ボトル to ボトルリサイクル」という、ペットボトルをペットボトルとしてリサイクルする取組を進めている。このように日本が得意としているところを、世界や若い世代にも情報発信できるとよいのではないか。

【涌井座長】

- ・ 私も同意見で、サステナブルツーリズムの動向（資料2-2 p15）が、マーケットの紹介にとどまっているのはもったいないと感じる。むしろ、環境省としてどのような形でリードしていくのかについて言及するほうが主体的でよい。

【JNTO】

- ・ 海外の認知度調査については、公園の名前だけを挙げて聞いているものか。我々も地方の訪問意向などを調査することがあるが、回答者が地名だけを認知していることは少ない。

【事務局】

- ・ 国立公園の認知度については、最初に国立公園の地図と情報をお示しし、そこが国立公園であるか知っていたかという聞き方をしている。

【涌井座長】

- ・ この議題については生のデータが示されたという段階である。今後は調査の設計をどうすべきかについて議論する必要がある。

（4）国立公園のブランドプロミスについて

○事務局より説明

【大西氏】

- ・ ブランディングプロミスという考え方はすばらしいと感じる。コロナで観光産業は痛んでいるので、地域経済の活性化という観点からは、このような視点をぜひ持っていただきたいと思う。
- ・ 観光庁、環境省からは既にさまざまなご支援をいただいているが、加えてガイドの課題にも目を向けていただきたいと思う。国立公園を楽しむためには質の高いガイドが不可欠であるが、ガイドでは食べていけない実態がある。星野委員に伺った奥入瀬の事例だが、地域としてガイドを育てることができないので、宿泊施設単独でガイドを育てたことがあると聞く。支笏湖の苔の洞門、オンネト一滝の湯など、本当は見せたいが多くの人が入れない場所がたくさんあるが、こうした魅力的な場所に認定されたガイドが入ることで、しっかりとお金をいただく仕組みが必要である。
- ・ 駐車料金を使うシステムは地域の問題も感じていて。海外のように入域料を取ることで地域として活用していくことが望ましいと思う。
- ・ また、車馬の乗り入れ禁止については過去のルールに縛られずに、国際水準を基に見直していただきたい。

【石井委員】

- ・ 環境省が世界の GX（グリーン・トランスフォーメーション）をリードするという姿勢を持ってほしい。サステナブルというと現状維持というイメージがあるが、より積極性を出せるよう考えてほしい。
- ・ 世界的に、排出権取引を超えて取組みを進めているところは少ない。国立公園でカーボンオフセット、SDGs、GX を推進しているというところを打ち出すことは、プロモーションとしてもよく効くと思うので、観光庁や JNTO のお知恵を借りながら環境省として進めていただきたい。

【江崎委員】

- ・ ブランドプロミス、ブランド管理が重要である。ブランドは品質管理とイメージ戦略の 2 つに分けて戦略を考える必要がある。その際のブランドメッセージは、現場に旅行者が行ったときに何を感じるかを踏まえながら考えるべき。
- ・ このブランドメッセージについては概ね良いと思うが、世界に向けて打ち出していくことを想定するならば、まずは日本らしさを踏まえることが必要である。COP において、人間が自然の一部であるという日本的な考え方もはじめは受入れられなかったが、後から理解されるようになり、生物多様性の考え方に組み込まれたという話を聞いた。環境省が世界にメッセージを伝えたケースである。ブランドプロミスにつながる根拠のあるメッセージであった。
- ・ ガイドについては、どのように育て、食べていけるようにするかが重要である。そのためには何らかのお墨付きが必要となる。国際的には個人ガイド認定が多いが、知識に偏ってしまうので、保険やサービスなどを含めた事業としてのガイドを認定することが必要である。
- ・ 日本のガイドの良さは親切さにある。これはフレンドリーとは別で、海外ではフレンドリーだが、不安な思いをしたとか、説明が少なかったなどといったガイドに対する不満を聞くことがある。日本の旅館文化、観光文化がガイドにも引き継がれている。こうした日本らしさを表現してほしい。

【涌井座長】

- ・ COP10 の際に「Living in Harmony with nature」の実現が掲げられたが、当時は特に欧米からあまり関心を持ってもらえなかった。開催国である日本の環境省の努力で 2050 年目標になったことは画期的であった。NBS（Nature based Solution）が議論になっており、「Nature positive」という新たな 2030 年目標が設定されたことから、日本の国立公園は無関係ではないため補足したい。

【奥田自然環境局長】

- ・ 新しい目標においても自然との共生の考え方が受け継がれているのはすごいことである。

【涌井座長】

- ・ 国立公園は、ここで進化できるかというタイミングだと考えているので、ブランドプロミスについてはポジティブに捉えている。しかし文言については議論が必要。
- ・ 具体的には、例えば「感動を与える美しい風景」について、美しいというのは誰が判断するのか、公的な立場から美しさを定義してよいのかという議論がある。別な表現に置き換えた方が良いのではないか。

- ・ また、サステナビリティについても重要なのはシステムである。経済の小さな歯車を回すシステムの設計が必要であるが、文言には見えてこない。
- ・ 自然と人々の物語を知るアクティビティについては、地域制である日本の国立公園においては重要である。自然風景と、厳しい自然を壊さずに適応した人々の暮らしが同時に見えることが日本の国立公園の魅力であるので、そこが見えるように文言を精査した方が良いと思う。
- ・ 一方、ブランドプロミスとブランディング活動の関係については早めに整理すべき。
- ・ この点は私に一任いただきたい。仕組みだけはスタートの段階に持っていきたい。

【委員各位】

→了解

【則久国立公園課長】

- ・ 文言については短期間で精査するので、改めてご確認いただきたい。
- ・ 加えて、抜けている項目があるなど、大きな部分でのご意見をいただきたい。

【江崎委員】

- ・ ブランド管理が重要。制定したあとに、現場では様々な事が起こるが、その際の判断基準をどうするか課題となる。ひとつは質の管理について、外部からの評価として質を点検するという点。もうひとつは対外的な関係の中で、どのようにお付き合いするのかという点。例えば、県には三重ブランドという認定制度、特許庁には地域団体商標の制度があるが、それらがどのように運営されているのかを踏まえて、自分たちのブランドとどう付き合うのかを判断してきた。

【涌井座長】

- ・ その通りで、評価の仕組みをあわせて検討する必要がある。事務局としては要検討事項としてお考えいただきたい。

【観光庁】

- ・ ブランドプロミス（資料3 p2）について、ブランディング活動の細目と活動指標とは、具体的にどのようなものを想定しているか。また、満喫プロジェクトの指標との関係についてはどのような整理になるのか。

【岡野国立公園利用推進室長】

- ・ 活動指標については別表（参考資料3）で整理している。満喫プロジェクトの進捗についても、この指標を用いて管理したいと考えている。

【JNTO】

- ・ ブランディングについて、そもそも国立公園がどのように認知されているのか関心がある。環境への取組みや日本らしさなどもあるが、一番の柱である保護という部分についてどれほど理解されているかが最も重要なのではないか。現代はレンジャーの活動など、裏方が見えていることがアピー

ルになる。自然が美しいのは保護活動があってこそなので、日本独自の取組みをアピールした方がよいのではないか。

【岡野国立公園利用推進室長】

- ・ JNTO には国立公園の特設サイトを置かせていただいているが、そこにレンジャーのインタビューなども公開しているのでご紹介したい。しかし国内では、保護ばかりで楽しめないと認識されている部分もあるため、その点を踏まえて4項目を設定しているところである。

【涌井座長】

- ・ これについても一任いただき、さらに精査していきたいと思う。施策の展開はこれをベースに進めていくということでご了解をいただきたい。

【委員各位】

→了解

(5) 国立公園満喫プロジェクトの取組状況と成果について

○事務局、現地事務所（阿寒摩周、霧島錦江湾、三陸復興）より説明

(6) 観光立国推進基本計画の策定について（観光庁）

○観光庁より説明

【涌井座長】

- ・ ご説明頂いた推進計画には持続可能な観光地づくり、経済の活性化、地方誘客の促進という3つの柱があり、かねてから主張してきた、観光経済は入込ではなく消費額等をベースとした立方体の経済であるという点について、国立公園だけでなく観光庁全体として舵を切ったことをうれしく思う。
- ・ 国立公園については、面的魅力向上に係る検討会も並行して走らせており、そちらと連携しつつ進めていくことになる。

(7) 意見交換

○涌井座長よりアトキンソン委員のご意見を紹介

【涌井座長】

- ・ 利用に対する負担を適正に行い、保護と利用の好循環をすべきというのがアトキンソン委員からのご意見であると理解している。
- ・ 一番重要な論点は、ブランド化とブランドプロミスをどうするのかという点であり、重要な議論がなされたと思う。委員の皆様から、方向性についてはご了解を頂けたと思うので、内容の詳細については一任をいただき、今後詰めていきたい。

【江崎委員】

- ・ 昔の展望台など、地域は過去の成功事例に引っ張られる傾向にあるが、そこに頼ってはいけない。地域の良さを生かして考えるべき。

- ・ 広域での戦略は他地域でも重要であるが、トレイルは線に見えがちで、地域の人からはどのような利点があるのか見えにくいところがある。面として見えれば安心できるので、その点を意識して進めてほしい。
- ・ 持続可能な観光業が、イコール持続可能な地域づくりではない。前者は事業者がやるべきことなので、利用者への発信にあたってはそこを混同しないように注意すべき。

【涌井座長】

- ・ いただいたご指摘を踏まえ、事務局と今後の議論を詰めていきたい。

3) その他

○事務局より事務連絡

○奥田自然環境局長より閉会挨拶

以上